2012 年　3 月 17 日・「図書新聞」では

生や死や詩と真摯に向かい合う
港のクリティーク

21 世紀という現在の地平を生きる人々へのまぎれもない賛歌

若宮明彦

佐相憲一氏の詩論集『21 世紀の詩想の港』を再読、再々読して、書棚に戻したのだが、四〇〇頁近いこの一冊の重さとは何か。力作や労作と呼ばれる分厚い研究書や評論集にはもちろん敬意を払うが、その重さを実感することは少ない。だが、佐相氏の詩論集には、まぎれもない重さがある。類書にないその重さとは何か。やや乱暴に要約していえば、それは言葉への思いであり、詩への熱さであり、人への信頼である。それらがずっしりと地層のように積み重なり、一枚一枚の頁に優しい風を運んでくる。しかもその風はまぎれもなく潮風だ。潮風にうたれながら、眼差しを緩め、その言葉に耳を傾けてみよう。

『21 世紀の詩想の港』は、六冊の詩集を持つ著者の初めての詩論集である。ここに収録された膨大な評論やエッセイは、様々な雑誌の文章と多数の詩書の解説を系統的にまとめたものである。本書は以下の八つの章から構成される。「第一章　海、港、詩」、「第二章　人生は詩かもしれない」、「第三章　詩想の港」、「第四章　二十一世紀に生きる古典の魅力」、「第五章　現代詩時評」、「第六章　夕焼けランデブー」、「第七章　現代の生きた詩書」、「第八章　ひと、文化、文学」である。このような構成を見ただけでも、佐相氏の視野の広さが伺われる。第四章で熱く語られる先達詩人への真摯な傾倒、第五章における詩書への的確な評価と展望、第七章に見られる優しい眼差しに満ちた詩集評、これらはいずれも読み応えがある。また、第六章や第八章の文学的エッセイも色々と示唆に富む。だが、ここではあえて、佐相氏の詩的運動のエッセンスに相当する第一章、第二章、第三章に注目してみる。

第一章は、渾身の書き下ろしの文章だ。本書刊行直前（二〇一一年九月）の執筆であることから、佐相氏の最新の詩への思いが綴られている。ここで彼は、海のポエジーを飄々と熱く語る。これらは彼独自のアフォリズムのようでもあるが、押し付けがましさはない。海に憑かれた詩人が語る優しく美しい箴言といったら誇張だろうか。

第二章の自伝的エッセイにおける詩想の軌跡も興味深い。「新たな土地を発見するためには、いったん海岸線を離れなければならない」と、いみじくもアンドレ・ジッドが述べたように、新しいポエジーの再発見のため、故郷の海洋都市横浜をひと時離れ、京都や大阪にも定着した。そこで得た様々な経験が現在の文学的な礎となっている。

第三章では、佐相氏の詩学がより具体的に語られる。その核となるのが、小論「港の思想」である。ここで具体的に主張されるのは、現代詩を原点に立ち返って議論し、新世紀の地平へと呼び戻そうとする明晰な批評精神である。そして港が時代と夢を照らす詩的灯台であることを希求する。これこそまさしく港のクリティークであろう。

また、佐相氏の最新詩集『港』（二〇一〇）では、そのタイトルの通り、港や海や水平線があふれるように現れる。佐相氏は、日本中いや世界中の港を巡って、生や死や詩とまさしく真摯に向かい合う。「いまを生きるあなたに、汽笛をおくる」。詩集『港』のあとがきで彼はいう。この言葉は、21 世紀という現在の地平を生きる 70 億人の人々へのまぎれもない賛歌である。

詩人あるいは詩論家として、佐相氏が多様な世代の人たちから厚い信頼を得ているのは、何らかの「どん底」や「底辺」を経験しているからだ。まずは相手の立場を理解することが、信頼されるための必要条件である。つまり、相手の下に立って相手の思いをすくい上げることこそが、相手を理解することであろう。理解す

るとは、まさしく understand（下に＋立つ）ということだ。佐相氏は詩人として立つ前に、様々な「どん底」を体験し、様々な「底辺」を見つめてきた。その時に感じた思いや当時の心象風景を深く心に刻んだことが、まさに彼の原点といえるであろう。詩や詩人を 21 世紀に再生させようとするこの好著を多くの方々に薦めたい。（詩人・北海道教育大学教授）

と紹介されています。

図書新聞ＨＰ
http://www.toshoshimbun.com/books_newspaper/week_article.php